

マクネマー検定

- 対応のある2組の標本の比率の差を検定する。
- 教育や実験の前後で、被験者の「はい」「いいえ」などの回答が、どのように変化したかの比率を検定する

検定の対象

対応のある2つの標本について考える。データをまとめると、次のような表になる。

		教育後		計
		はい	いいえ	
教育前	はい	a	b	$a+b$
	いいえ	c	d	$c+d$
	計	$a+c$	$b+d$	n

マクネマー検定

- カイ二乗 (χ^2) 分布を利用して検定する
- 回答が変化した個所 (「はい」→「いいえ」、「いいえ」→「はい」) に着目する

帰無仮説と対立仮説

対応のある2つの標本の比率について調べる。

- 帰無仮説 H_0 は「2つの標本の比率に差はない」
- 対立仮説 H_1 は「2つの標本の比率に差がある」

検定統計量の算出

- $\frac{b+c}{2} > 5$ の場合...
- 自由度1のカイ二乗 (χ^2) 分布にしたがう、検定統計量 χ_0^2 を次の式から算出する

$$\chi_0^2 = \frac{(b-c)^2}{b+c}$$

- Yatesの連続補正を使う場合は、次の式から検定統計量を算出する

$$\chi_0^2 = \frac{(|b-c|-1)^2}{b+c}$$

- $\frac{b+c}{2} \leq 5$ の場合は、二項検定を利用して有意確率を求めるか、Yatesの連続補正を使う

仮説の判定 (両側検定)

- 検定統計量 χ_0^2 と、自由度1、有意水準 α の有意点の値(カイ二乗分布表などから求める)を使って、判定をする
 - 帰無仮説 H_0 を棄却: $|\chi_0^2| > \chi^2$
 - 「有意に差がある」「検定の結果、有意である」
 - 帰無仮説 H_0 を採択: $|\chi_0^2| < \chi^2$
 - 「有意に差はない」「検定の結果、有意でない」「差があるとはいえない」